

**機械工学委員会・土木工学・建築学委員会合同
IUTAM 分科会（第 4 回）・理論応用力学企画小委員会（第 2 回）
合同会議 議事録**

日時 平成 30 年 9 月 20 日（月）14:30～16:10

会場 日本学術会議 5 階 5-C(1) 会議室

出欠 （◎委員長，○副委員長，△幹事）

IUTAM 分科会

出席 ◎菱田公一，大島まり，○金田行雄，△亀田正治，岸本喜久雄，久保司郎，佐野 理，新野 宏，竹内 徹，西村直志，橋口公一，藤井孝藏，△前川宏一，緑川光正，吉村 忍

欠席 小峯秀雄，渋谷陽二，松本洋一郎，矢川元基

オブザーバー 泉 典洋（土木学会応用力学委員会）

理論応用力学企画小委員会

出席 ◎菱田公一，荒木慶一，△亀田正治，岸本喜久雄，佐野 理，西村直志，高木 周，高橋正樹，○前川宏一，山川誠，山田貴博，吉川暢宏，吉川 仁

欠席 加藤準治，河原源太，堀 宗朗

配布資料

資料 1 第 24 期第 3 回 IUTAM 分科会・第 1 回理論応用力学企画小委員会 議事録

資料 2 土木学会応用力学委員会・IUTAM 分科会打合せメモ

資料 3 The General Assembly of IUTAM in Boston 参加報告メモ

回覧資料 東京観光財団コンベンション事業部パンフレット

議事

1. 前回議事録の確認

菱田委員より資料 1 に基づき説明があり，既に承認済の前回議事録を確認した．

2. 理論応用力学講演会について

菱田委員長より，理論応用力学講演会の経緯と現状について説明があり，資料 2 に基づいて，第 65 回理論応用力学講演会開催にあたっての土木学会（次回幹事学会）との打合せ会（2018 年 6 月 29 日：土木学会にて）の概要が報告された．今後の理論応用力学講演会の継続性を鑑み，次回開催の基本方針として，1) 幹事学会の土木学会が主催し，日本学術会議は共催の立場とすること，2) 独立採算での開催とすることとし，従来通りの関連学協会との共同運営としたいことが説明され，承認された．続いて土木学会・泉委員長（運営を担当する土木学会応用力学委員会委員長）から，2019 年 5 月 17—19 日に，北海道大学にて第 65 回講演会を開催する旨，報告された．また，同日程で土木学会・応用力学シンポジウムも別途，開催されることが紹介された．なお，最初の実行委員会において，菱田・泉両委員長から関連学協会への説明と，従前通りの協力依頼と申し入れを早急に行うことが確認された．

続いて英文論文集の編纂と出版について議論が交わされた。英文出版のこれまでの役割、意義、講演会における位置づけ、運営体制の継続性等にわたって広く意見交換がなされ、1) 紙媒体による英文論文集は廃止とし、2) 英文論文集に代わる情報発信の媒体等について、今後、企画小委員会で検討することが決まった。今後の検討に当たって、従前から英文論文集を送付してきた図書館・学協会等への配慮、講演概要の英文化と著者の負担軽減、アウトリーチにおける公開性と著作権、学協会が出版する論文集での特集号の編纂等、意見交換がなされた。

3. IUTAM Meeting of General Assembly in Boston の報告

資料3に基づき、菱田委員長より2018年7月23-24日に開催されたGA ミーティングにおいて、日本からのシンポジウム提案が認められたこと、CCの投票の結果、高木委員が選出されたこと等の概要が報告された。4名が日本代表として参加したことの効果、継続的に出席してプレゼンスを発揮、維持していくことの重要性についても言及された。

4. ICTAM 誘致について

菱田委員長、岸本委員から、ICTAMの誘致に関して東京観光財団との準備打合せの現況について報告があり、開催場所、時期、会場、登録料の水準、IUTAMへの上納金等に関する意見交換を行った。

開催場所は東京国際フォーラムが望ましいが、現時点では確定予約が取れないので、京王プラザホテルを当面抑えている。両者を会場候補として並立して持っておき、弾力的に誘致交渉にあたるのが良い。横浜は2022年にWCCM開催が既に決定していることを考慮する。誘致条件の一つとして2,000人規模のopening/closing sessionが可能であることを勘案しなければならない。開会において東大安田講堂を利用することも一計である。内外の参加者の利便を考慮して開催時期を設定するのは当然であるが、会議誘致活動の強い広報活動と周知、気運の盛り上げが重要かつ急がれる。関連学協会が集う理論応用力学講演会の実行委員会でも周知を図りたい。広く分野を横断して参加者を募り有意義な国際会議とするうえで、日本流体力学会にもフォーラムの中心になってほしい。本件と平行して、日本学術会議においても国際会議を支援する体制作り等が議論されている。力を付けてきたアジア諸国を仲間に誘い入れていく努力も中期的に意義がある。

5. その他

特に無し。

以上